

古典語ノト

—「語る」から「語らふ」へ—

清水文雄

「話す」という言葉がある。この語について大言海は、「心事ヲ放ス意」と注している。もしそうであるならば、言語表現を現象面において正しく捉えたものといふことができる。しかし「話す」という語そのものは、文獻の上でいうと、中世の狂言などにあらわれているのが初見である。たとえば、「成上り」という狂言がある。

主人は太郎冠者を供につれて清水の御縁日に參詣して帰るが、翌日前夜の大参りのなかで何か面白い話をきかなかつたか、と改まって太郎冠者にたずねる。太郎冠者がきいた話をつぎつぎと報告しているうちに、山芋が鯛になった話をする所がある。それをきいた主人が、

いかさま、これは成るまいものでもない。ほかに何も珍しい話は
ないか。

とつぎを催促する。そうすると、こんどは、

田辺の別当の、くちなわ太刀と申すことを話してござるが、聞かせられてござるか。

と、反対に問い返す。ここには、名詞形としての「話」、動詞形としての「話し(て)」が相ついで出ている。

「話す」については、このような用法が中世に見られるのである

が、それ以前でいうと、「語る」という語がそれに相当すると見てよい。というよりも、「話す」という語に潜在する機能面を、この語が明確にあらわしているといふことができる。「語る」は、古くから用いられている語で、文字伝来以前の長い期間を含めて、古代における生活語のなかで、「聞く」とともに最も重要な位置を占めていたものと思われる。従つて、「話す」働きがどういふものであるかを知るためには、さかのぼつて、「語る」の意義を探つてみるのが便宜であらうと思ふ。

そこでまず、「語る」について大言海のいふところをきいてみることにしたい。語源については、この語は「形」を活用させたもので、「宿る」^{ヤド}「頭る」^{カバ}「被る」などと同じく、「事象ヲ言フ意ナルベシ」といっている。語源説としての当否は別として、何らかの事象を言語によつて表現することを意味する語であることは間違いないまい。つぎに意味としては三つをあげている。

(一)意ヲ、口ニ述ブ。言フ。話ス。

(二)文ニ、節ヲツケテ、読ム。(三)論フト異ナリ、かたり物、うたひ物ノ別アリ)

(四)当歳ホドノ赤子、無意味ニ、物言フ。アギトフ。

(一)の用例としては、古今集巻一の「詠人しらず」の歌、

忍ぶれば恋しきものを人知れず思ふてふこと誰にかたらむ

をあげ、(二)の用例としては、徒然草第二二六段の、

平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へてかたらせけり。

その他をあげている。「浄瑠璃をかたる」もこの部類に入る例である。

しかし、後には「詠ふ」と混同して、「小座頭あるに、浄瑠璃をうたはせ、云々」(宗長日記)などと用いられた例のあることも指摘している。(三)には別に用例はあげていない。

この語の第一義は、少なくとも表面的には、(一)にあげたような意味で使用されていることは間違いない。広辞苑に「心に思っていることを言葉で述べて相手に伝える」といつているのは、伝達の意味を明示した点で、この語の真意にやや近づいた観はあるが、表面的にうけとつている点は同じである。大言海が用例としてあげた古今集の歌の結句の「誰にかたらむ」も、表面だけからいうと、「だれに話そうか」ととつてもよさそうである。しかし、「忍ぶれば恋しきものを」といわれるような恋情の切なさは、単に意中をだれかに伝えればすむというものではあるまい。初句からこの歌を説き下して

てくる時、「人しれずおもふてふこと」を、当の相手に伝えるすべのない今、せめてこの秘密を親身になって聞いてくれるだれかに伝え知らせ、そのだれかの共鳴を得ることによって、胸中の苦悩を和らげようとするのである。同じことが、同じく古今集卷上に入る、

つぎの素性の歌にも言える。

見てのみや人にかたらむ桜花手ごとに折りて家づとにせむ

の「人にかたらむ」は、見てきた桜花の美しさを人に話して聞かせるだけではすまされない感動が、内に渦巻いているのである。それ

を「手ごとに折りて家づとに」ししようとしたのは、単に桜花の美し

さを、それを見ない人々に、言葉で伝達しただけではすまされず、

進んで相手のつよい共感を求めようとする意志が働いていることを

知るのである。

このようにみてくると、「語る」には、もともと語りかける相手の

心を捉えようという意志がこめられているとみななければならぬ。

それを説得の意志と呼ぶこともできる。少なくとも、「語る」

の第一義的な用法はそうであったとみるべきである。このように、

「語る」が能動的な自己主張や自己表現の意味をもつことは、その

用例とこの語の歴史をたどつてみれば、明らかなことである。

このことは、「語る」に、継続・反復の意をもつ接尾語「ふ」の

ついた「語らふ」になって、一層はつきりしてくる。この語についても、大言海は、「語合ふノ約」とし、つぎに四つの意味をあげて

いる。

(一)互ニ語ル。談合ス。謀叛。

(二)ナカヨク交ハル。友愛。

(三)男女、互ニ言ヒ契ル。契語。

(四)万人ニナス。他ヲ説キテ、我が党ニ引キ入ル。朋党。

「語らふ」は、多く(一)(二)のように用いられたが、また(四)のように

も使われていた。たとえば、徒然草第五四段に「能ある遊び法師ど

もなどかたらひて、云々」とあるのなどは、それである。「語る」

が本来持っている意志が、ここで一段と強化されたものと解すること

ができる。さらに、これが「語る」に反轉して、「だまして財物

を取る」(広辞苑)意の「騙る」ともなるのである。

の用例、さらにそれが「語る」に反響した場合の用例は、多少皮肉味を持った語で、悪徳的な傾向があるものであるとし、この種のものは平安末期頃から著しく見え出したとしていられる。しかし、具体的に用例に当たってみると、「かたる」がこのような意味に用いられるのは、はるかに下って、江戸時代に入ってからのものである。

八代將軍吉宗の寛保二年（一七四二）に制定された法令に、公事方御定書というのがある。そのなかの刑法の部は普通「御定書百箇条」と呼ばれるもので、その一箇条に「巧事、かたり事、重きねだり事致候もの、御仕置之事」とある。このような意味での「かたる」「かたり」は今日でもなお用いられている。本来の「語る」が持っていた第一義的な意味が、このように屈折して行くことは、一つの言葉の歴史を考える時、興味ある問題を提示してくれると思う。

なお、「語らふ」が同様の意味で多く用いられ出したのは平安末期になってからであるとしても、それ以前にそのような用例が全然見えないわけではない。たとえば、源氏物語夕顔の巻にも、こんな例がある。空蟬が夫の伊予介に伴われて任国に下ることになった時、源氏はあきらめ切れず、空蟬の弟の小君をうまく説きつけて、引きとめさせようとする所がある。

「今一度はえあるまじきにや」と、小君をかたらひ給へど、……

この「かたらひ」も、小君をうまく抱き込むとか、手なづけるとかの意味を幾分持っているものとみてよい。相手を説得しようとする意志が強化されれば、そこに悪徳の傾向があらわれてくるのは、もともと説得ということが自己主張の一形態である以上、当然のことといわなければならない。これが悪徳の傾向を濃厚にしてくるのが平安末期頃からであるといわれるのは、武士の抬頭につれて戦亂闘

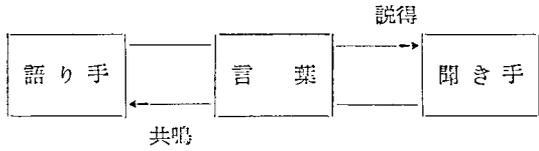
争相つづ時代には、「朋党」の強化拡充が勝利の絶対条件となってきたからである。「語る」の第一義が、無制約に徹底させられたものといえることができる。平家物語巻一の「鹿の谷」の条に、新大納言藤原成親が、平家討伐の陰謀をたくらむ所に、つぎのような記事が見える。

外人もなき所に兵具をととのへ、軍兵をかたらひおき、其の営みの外は他事なし。

これなどは、その一例にすぎない。

さきに私は、「語る」には、もともと語りかける相手、すなわち相手の心を捉えようとする、説得の意志がこめられているといったが、「説得」というのは、折口流の言い方をすると、語り手の言葉が、聞き手の魂に働きかけて、語り手の予期した変化がそこに惹き起こされることをいうのである。これは聞き手の側からいうと、言葉を媒介として、語り手の思想に共鳴したことになる。折口氏は共鳴のかわりに感染という語を使っている。つまり、「語る」が「語る」となるためには、語り手は言葉を媒介として聞き手を説得することが必要であるが、これを聞き手の側からいえば、同じ言葉を媒介として語り手の思想に共鳴（感染）することが必要であるといふことになる。この関係を図示すると、つぎのようになる。

説得の意志が強化されて、「他ヲ説キテ、我が覚ニ引キ入ル」意味の「かたらふ」となった場合、聞き手が語り手の思想に共鳴して、何らの抵抗もなくその朋党に加わることもあるが、到底共鳴しえないこともある。後のような事態に立ち至った時、語り手はさらに別の強行手段を用いて、あくまで聞き手を説得しようとかかり、なお成功しない時は、「問答無用」の實力行使に出ることもある。



そうなると、すでに言葉の問題を逸脱した破壊行為というほかなく、ここでは論外とせねばならないが、「語らふ」には、勢いの赴くところ、もともとそうなりかねない危険性ははらまれているわけである。そして、このことは、つきつめていけば、その前身である「語る」そのもののなかに、すでに可能性として内包されていたと認めないわけにはいかないのである。

それでは、「語る」が極めて自然な形で成立する場合、すなわち聞き手が語り手の思想に素直に共鳴してゆける場合の条件は何か、ということになるが、このことについては改めて考えてみなければならぬ。

(三七、七、一一)

(本学教授・文学博士)